

かぐらおが

第 70 号

平成 3 年 12 月 1 日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は初代学長 山田守英氏)



(写真撮影 動物実験施設 稲場 茂)

初冬の丘

図書館長雑感……………内田 倅喜… 2	研究室紹介……………稲岡 徹…10
ヨーロッパでの生活体験から……………松嶋 少二… 3	研究室紹介……………金谷 健史…10
大和十津川村考……………天羽 一夫… 4	体育大会……………11
解剖学実習を終えて……………田中進一郎… 5	解剖体慰霊式……………11
解剖学実習を終えて……………北 飛鳥… 5	「公開講座」好評を博し終了……………11
卒後10年を顧みて……………森本 典雄… 6	新入生研修(第2回目)……………11
卒業後10年に思うこと……………山野 三紀… 7	スキー教室のお知らせ……………12
留学生寄稿……………ハジェフ・クリスト・アレクサンドロフ… 8	教官の異動……………12
アフリカツメガエルと抗癌剤……………大崎 能伸… 9	窓 外……………寺山 和幸…12



図書館長雑感

内田 倅喜

雑感を書けということですから、とりとめのない文章になったり、また、先に図書館月報に書いたことと重複することをお許し願います。

かつて附属図書館開館の頃、といっても図書館の建物はまだなく、教室またはセミナー室を転用していた頃の事ですが、将来の大学院開設に向けて専門図書30,000冊以上、学術雑誌300種以上をいかに揃えるかが大問題でした。それが平成2年の数字を見ると、専門その他を含めて、和洋図書103,851冊、和洋雑誌2,079種ということになっています。

しかし、今度改正された大学設置基準を見ると——大学院には研究科及び専攻の種類に応じ、図書、学術雑誌、視聴覚資料その他の教育研究上必要な資料を系統的に整理し備えるものとする——となっています。改正前にあった——必要な種類及び冊数の図書及び学術雑誌——という数量的表現がなくなりました。一方近来国立大学図書館の学術文献に関するオンライン情報検索化が進行しました。本学でも館内図書の週及入力は昨年12月で終わり、現在各講座保管の図書について作業中であります。しかしこの12月にはそれも完了するでしょう。

このように見てくると、図書館が留意する事に、数量的制約がなくなる反面、視聴覚資料、オンライン情報検索、CD-ROMなど多様性が生じたことになります。換言すると、人員も予算も増やさないがサービスを低下させることなく、質的向上をはかれと言われていることになります。そうすると次には、究極の図書館とはどんな形になるのかという疑問が生じます。図書館とはあまり本などなく多数のパソコンとファックスが並んでいる、棚にはCD-ROMも沢山あるかも知れない、そんな所が想像されます。どこかで各大学が同じ図書や雑誌をそれぞれ購入することは無駄であると考えているようです。勿論一方ではセンター図書館があってあらゆる図書、学術雑誌が揃えられ、毎月新刊図書、雑誌の入力が行われていることになるでしょう。医学関係のセンター図書館は東北大学ということに既になっています。理学、工学等についても夫々決まっています。

図書館サービスの多様性が生じた一方予算は増えない、オンライン情報検索が主力となる、等々考えると従来のような図書購入のあり方が問題となるでしょう。本学の図書購入費の73.4%を占めるのは外国雑誌購入費です。そしてここ数年外国雑誌は平均7.5%ずつ値上りして来ましたが、現在、来年度の外国雑誌の購入予約をしてい

ろですが、平均9%の値上りは必至のようであります。一方、ドル建となると為替レートの問題も生じます。色々なことがこの数か月にありましたが、幸い円高傾向にあり、これを書いている頃は129円台です。値上げと円安が重なると大変なことになります。

昭和48年には15,515冊しかなかった蔵書が、平成2年には103,851冊になりました。ところで図書館の利用状況はどうか気にかかるところです。入館者数で見ますと49年の23,930人から平成2年の126,191人ですから5.3倍となりました。その間53年は前年度比2.2倍となり、その他の年は微増です。53年といえば1期生が6学年の時で学年進行の完成した年です。しかし、貸出利用者を見ると、学生も教職員も共に56年をピークに減少し、平成2年はその41%になりました。特に学生の利用者数は56年に比して30.5%も減っています。56年といえば蔵書冊数66,471冊と平成2年の64%しかない頃です。

一方開館時間を見ると、かつて平日5時、土曜日3時迄となっていたのが、研究者、学生の度々の要望によって現在は平日8時迄となりました。ところが、学生諸君も度々開館時間の延長を要望しましたが、私の部屋の窓から図書閲覧室を見る限り、6時以降殆ど人影をみません。53年からしばらくの間夏休み中など上下閲覧室の机がすべて学生諸君、特に6年生によって占められ、研究者が行っても座る場所のなかったような状況はここしばらくみることが出来ません。

勿論、図書館は館内資料を使って調査研究する所であり、試験勉強だけの場ではありません。しかし、図書館はいかなる目的の勉強でも利用されることを望みます。図書館には映画・演劇音楽のCDも入っています。これも多様性の1つでしょう。疲れたら視聴覚資料室へ行ってヘッドホーンでこれらの音楽を聴き気分転換を図るのも1つの方法だと思えます。

先程あげた色々な数字の1つだけをとって利用者の減少と断定するのは早計かも知れませんが、総合するとどうも学生諸君の図書館利用が減っているように思えてなりません。文献複写の数は確かに増えています。すべてその場でコピーして、それをどこかで読んでいるのでしょうか？コピーしただけでは何の意味もありません。一番こわいことは本を読まなくなることです。

以上図書購入の面とその利用の面についての雑感を述べてみました。

(化学 教授)



ヨーロッパでの生活体験から

松嶋 少二

話は少し古くなるが、昨年夏、ヨーロッパに約3ヵ月間滞在し、少しはこの地に住む人達の生活を見聞することができたので、その頃の記憶をたどりつつ異郷の地で考えたことを2、3記してみたい。

最初に訪れた統一前の西独では、自転車専用道路が大変良く整備されているのに驚いた。幅が広く、車道とはつねに滑らかに移行していて、いかにも走りやすそうである。何回か外出するうちに、この道路は歩行者にとって大変危険であることに気が付いた。ヨーロッパの人達は足が長い。そのためサドルの位置は私の胸程もあり、また、車輪は大八車のそれに匹敵する。したがって、同じ速度でペダルを踏んでもめちゃくちゃに早く進む。はるか彼方に小さな自転車の姿を発見したと思ったらもうすぐ近くに迫っているのである。このような状況はその後訪問したほかの国でも同様であった。日本では自転車で通学するのはせいぜい高校生までだが、ヨーロッパでは大学生もよく利用するようである。通勤に自転車を使う人も少なくなく、退社時間の頃になると自転車の列が延々と続く。デンマークで私がお世話になったモラー先生が遠く離れた自宅から30分以上もかけて毎日自転車で大学へ通ってくるのを知って、ヨーロッパでは猛スピードで自転車を走らせる理由が分った。そういえば、モラー先生のズボンはお尻の所がかなりすり切れていた。

ヨーロッパでは相当以前から自動車の排気ガスによる大気汚染が問題になっていたようである。20年前、日本ではモータライゼーションなどという言葉が自動車会社の宣伝文句になっていた頃、私の英会話の先生であった英国人からエアポリューションという聞き慣れない言葉を教えてもらったことを思い出す。現在では、当然、日本でも排気ガスによる汚染が問題の害であるが、セカンドカーだの高級車志向だのとエスカレートするばかりで、少しでも空気を汚さぬようにしようなどと考える日本人はあまりいないようだ。私は、この小さな国にひしめき合っている日本人こそ、自転車をもっと利用すべきであると考えている。そのためには、まず、自転車専用道路を整備する必要がある。幸い、北海道の道路は幅が広いので、車道の一部を自転車専用で改造することはそう難しくはなさそうである。

ドイツではじめていったスーパーマーケットで、支払いのために私の前に並んでいた人達が買った品物を各自用意してきた袋に納めているのを見て一瞬これはしまったと思った。運よく小さい手下げカバンを持っていたの

で、これに全部詰め込んで、パンパンになったカバンを抱えてアパートに帰ったのを思い出す。ビニール袋はカウンターに申し出ると売ってくれることがあとで分った。有料ならばかなりの人は自分で買物袋を用意するであろうし、また、たとえビニール袋を買う人がいたとしても、自分でお金をだして買った袋は大切に何回も使うであろう。日本のように、ただで手に入れたビニール袋は一回限りでゴミになる確率は高いであろう。私は、スーパーにおけるビニール袋システムに、地球汚染と資源の節約に対するこの地に住む人達の心をみたように思った。

節約といえば、ドイツで感心したことがもう一つある。それは、私が住んでいたアパートのエレベーターホールに設置された照明システムで、これが大変ユニークであった。私の部屋は5階にあり、外出するときにはいつもエレベーターを利用していった。エレベーターホールに窓はなく、昼でもまっ暗で、はじめの頃は手探りでようやくスイッチにたどりつく有様であった。ホールの照明はいつも消えているのに、スイッチを押すとちゃんと点灯するので、エレベーターを下りたあと各自がスイッチを切るものと思っていた。ところが、実際はそうではなく、このスイッチは点灯後比較的短時間で自動的に切れる仕組みになっていることがあとで分った。

ヨーロッパの人達の日常生活は、日本と比較して総じて質素であると思った。スーパーに並んでいる食料品の種類は明らかに少なく、リングは赤と青の2種類しかなかった。現在の日本人の生活はぜいたく過ぎると常々思っていたので、私は、ヨーロッパにおける簡素な生活習慣に大いに共感した。よく云われることだが、たしかに、母国を離れてしばらく外国で生活してみるとはじめて母国の長所と短所がはっきりしてくるようだ。その場合、外国に見ならうべき点は多いが、これは日本の方が優れていると思われることが少ないのは大変残念である。地球の汚染を防止するための工夫を例にとってみても、ヨーロッパの方が数段進んでいるように思われる。われわれ日本人は母国ひいては地球の将来を考えることにあまり熱心ではないようである。われわれはどのような日本を目指すのかを、もっと真剣に考えていかなければならないと痛感する。

(解剖学第二講座 教授)



大和十津川村考

天羽 一夫

「語り聞かせんやよ童、頃は8月19日、降り続きたる長雨は、次第次第に吹きまきて、山の崩るるその時に、麓の家はつぶされて……。古郷をあとに草まくら、登る山路もつつがなく、此処にうつりて村をたて、新十津川と名付けたり。」(西村直一作詩、抄)

この1か月テレビで大平記は吉野を舞台に展開し、また2回に亘って放映された新十津川物語の原作者川村隆氏は大和五條市新町に住まれ、私が五條の小学校で3年間過ごした頃、同じ小学校に居られたのではないかと思うと、懐かしく、十津川のことなど書いてみたくなった。それでは十津川の創成から始めてみよう。

ヤマトの創世を見た人はいないので妄想を逞しくすると、地質学的に新世紀、古第三世紀の日本列島は大陸と連なり、日本海という河の周辺の草原、樹林でナウマン象、オオツノシカ、スイギュウなどの動物を明石原人、アイヌ、ギリヤーク、モンゴル原人などが棍棒や剝片石器を振り回して追っていた。約5,000万年前のことである。

やがて氷河期を過ぎると弧状列島が誕生し、残された原人達は食性にしがたってテリトリーを確保した。しかし弧状列島では殆どお互いの交流もなく、冒険者や漂流者がわずかの物流を支えたのであろう。同じ頃黒潮に乗ってマレー、ソロモン群島の方から稲を持った南方種族がやって来た。彼等は温暖で稲作の出来る九州北部、山陰西部、紀州南部に住み着き、次第に川の上流に向かってテリトリーを拡大しはじめた。10数万年以前のことである。この頃の関西は琵琶湖と瀬戸内海は一連の海で、六甲、生駒、金剛山地はナガスネヒコ、ツチグモなどの種族のテリトリーであった。

また数万年が過ぎた。縄紋、弥生の頃である。北九州に住み着いた種族は稲作の発展と備蓄に助けられ、人口の増加が始まり、追い出された集団が親戚筋の種族を頼り、稲を持って東上し始めた。出雲でも人口飽和に悩み、中国山地で鉄器なども生産していたほどなので、再び西下して契約の地ヤマトに入ろうとしたが先住民に追い払われ、漸く親戚筋の住む紀州南部の海岸に到着し、ヤマトを目指し、熊野、十津川の山地に進出していた親戚種族に援けられ大峰山の尾根伝いにトビ族、カラス族の援助を受け、ツチグモ族や宿敵ナガスネヒコ族を破って、ヤマトに住み着き、湿地を拓いて稲作を始めた。

ヤマト集団もやがてテリトリーを拡げ始め自治体制を作り、リーダーはヒコと呼ばれたらしい。このヒコが現在の天皇家の祖というが定かではない。紀伊山塊、伊勢、熊野の山岳人種はその場所ですべて定着し、ヒコ族とは親密であった。大海人皇子を援け、保元の乱には京都まで出掛け、後醍醐、後村上を援助し、近くは幕末天誅組をも援けている。奈良、和歌山にヒコ族の名をとった大搭村のあるのはその証でもあろうが、義理固く、土着性が強いが、音頭をとるとワーッと事を始める弥次馬的な性格も持っている。

幕府が倒れ、明治の世になっても十津川での生活は変わらず、材木、本地屋などで当時の平均的な生活水準を保ち、廃藩置県の時から十津川郷土と名乗り始めた。

明治22年8月中旬、台風が大峰、高野山塊を襲い、1時間170mmの降雨が3日間で約10,000mmあったという。紀伊山塊は壮年期山脈で、砂岩、粘板岩を表土が覆っている。そこに大量の降雨があったので、表土諸共、岩盤まで押し流し、大量の山崩れが発生して、山脈にしがみついて建てられた人家や農地を樹林とともども十津川におしながし、川底は30m高くなったという。このとき十津川村では600戸が流出し、200人が死亡している。被害は十津川村だけでなく、下流の新宮、田辺、和歌山でも大量の家屋流出や死者が出たと伝えられる。もともと豊かでない十津川村は復旧の目途もたはず、たまたま来阪した永山武二郎と奈良県知事の税所篤は同郷の鹿児島県人なので十津川村民の北海道移住に諸々の便宜が図られ、移住者を募り600戸、3,000人が思いのほか早く決心して荒廃した自村を離れ、同年10月中旬北海道樺戸郡トックの地に向かった。

歴史の頁を繰ると、原始林を通り、樺戸の屯田部落で一冬を過ごし、翌年から笹を刈り樹林を拓き、蕎麦、豆を播き、ついには稲作を始めるに至ったという。

今、新十津川村は極く平凡な農村で、開拓の跡は全く残っていないが、昭和初期のこの地の水田風景をみると田圃の中に巨木の切り株が点々と残り、農家らしきものが点在して開拓の苦勞の一片を窺うことが出来る。その歴史は、新十津川町史、北海道百年(北海道新聞社)などに詳細が記されている。

一方、母村十津川村は大和五條から丹生川に沿い、賀名生を過ぎ、天辻峠(現在は天辻トンネル)を越えると大搭村、ここが十津川の入口である。谷は深く、樹林は茂り、川に沿う危なっかしい道が迂曲し、処々国鉄五新線建設の名残を残すだけで、昔と変わらず森と川が生きている。道路に人影を見ることもなく、木陰に家々の屋根が見える。V字谷は深く、日本一長いと言われる吊り橋もあるが、水害以前は渓谷をはきんで話も出来たが往来する間に餅がつけたほどだったと伝えられる。春には梅、秋は柿、栗の実が多い。現在の戸数は2,300戸、人口13,000人で、水害以前の戸数、人口と変わっていない。十津川は昔から13,000人前後が暮らせたのである。増えもせず、減りもせず文明から遠い険しい山谷はこれだけの人を抱え生きて来たし、また将来も生き続けるのである。

(放射線医学講座 教授)

解剖学実習を終えて

第3学年 田中 進一郎

解剖学実習が終わって、早くも半年がたとうとしている。医学生にとって、不安と期待の入り混じる一つの劇的な出会いであり、鮮烈な、忘れ難い経験となったこの実習をふり返ってみたい。

新学年の始まりとともに、いきなり始まるこの体験を前に、覚悟していたとはいえ緊張せずにはいられなかった。そして、実習が始まってからは、連日のハードな作業と勉強に肉体的にも精神的にも相当な疲れがたまったものであり、3ヶ月後に実習が終わった時には、大きな虚脱感とともにずい分ホッとしたのを覚えている。

しかし、それと同時に人体という一つの世界の探究は、なんと魅力のある素晴らしい経験だったことだろうか。筋や脈管、神経の走行、臓器の位置関係などは本を読めば理解できる。もちろん実物の方が立体的に理解できてよいわけだが、それ以上に私が感じたのは、教科書の上での事柄を実際に一つ一つ確かめるということ、そしてその物の太さ、堅さ、重さを自分の手で実感として理解するということの面白さだった。

また、本に書いてあることは、確かに実物を理解する上で助けにはなるのだが、それだけでは妙に頼りないも

のである。知識は実物に触れた時、初めて生き生きとしたものになるのだと思う。例えば、迷走神経は胸腔内・腹腔内のあらゆる臓器を支配しているということも、心臓や消化管の壁にとっても一本一本剖出することが不可能な程に細かく分枝して分布している様を見ることによって、本当に納得することができた。

未熟さの為に、実習書に引きずられがちではあったが、実際の人体は必ずしも教科書通りではなく、ちょっとしたバリエーションがあり得るのであり、教科書の記載に拘泥する必要はないということも初めて知った。これまでの教科書が絶対という発想から、今、自分の目の前にある実物こそ最も正しいという発想へ、今回の実習を通じてある程度転換できたように思う。

最後に、医学という決して学び尽くすことのできない長い道のりを歩み始めたばかりの我々に数々の知識と確かな指針を与えて下さるため、無償で自らの身体をさし出して下さった方々の御志に対して深く深く感謝申し上げます。この先膨大な医学知識のあまりの広さ深さにとすれば意気をくじかれ、初心を忘れそうになることも幾度もあることでしょう。しかし、そのような時あなたの御志を思い出したいと思います。

「この遠い道程のため」！

解剖学実習を終えて

第3学年 北 飛鳥

解剖実習が始まると聞いたとき、私はとても嬉しかった。人体の構造にじかに触れて見ることができると聞いていた。医大に入って良かったと思ったのはこの時だった。私は実習の日をワクワクしながら待っていた。

間違いなく私はワクワクしていた。白布を取り御遺体を見るまでは、私は未知の世界をのぞき見ることに関心を奮われ、ステンレスの台の上に横たわるものが一体何なのか、解かっていた筈のことに眼をつぶっていた。「その人」はそこにいた。

私に体を触れさせ、私の見たいものを提供し、私にその体にメスを入れることさえ許してくれる人だった。

間違いなく、そこにいるのは「人」であった。かつて食べて寝て、日常生活を楽しんだ人だったことを憶い出した私は、容易にメスを入れることはできなかった。

心臓が痛くなった。まるで自分が切られているようにキリキリと痛んだ。もう痛くない筈の人について謝ったりしながら、私は見たい世界をのぞかせてもらった。

「その人」の体はとても巧妙だった。いくつもの筋肉、いくつもの神経、いくつもの血管、いくつもの骨。全てが巧妙であり全てが合理的であった。自分が同じ構造をしていると思うと尚更感心してしまった。

「全く、どこの誰がこんなものをつくったんだろう。」

人の体は素晴しかった。私は、いつの間にか「おじい

ちゃん」と呼ばれるようになったその人から、欲しいものは何でももらえた。私が要求する知識は、全て提供してくれる寛大な人だった。

しかし、スケッチやテストという日常の問題が重なると、私は途端にヒステリーを起こし、何の知識も要求しなくなってしまった。時間と教科書を読むことだけが大事になってしまった。意欲は、とっくにすり切れていた。そうして、テストが終わる度に後悔するのであった。

「おじいちゃん」は当たり前のように、そこにいるのではない。それを「あって当然」のように足蹴にしていいる理屈はない。しかし、実習者は御遺体から学ばねばならない、などという言葉はついぞ忘れられがちであった。

後悔していた。今でも後悔しているが、実習が進むごとに、見ておけば良かったと思うところがいくつもあった。実習をおさなりにして自分の首を絞めたのだった。

おじいちゃんは沢山の機会をくれた。私がそれを生かしたとはとても思えないが、解剖学的に人を見るようになったことは1つの変化だと思う。そして、多少の違いはあるにしても、そこで見た臓器、そこで見た神経、そこで見た筋肉、血管は私にもあり、そして私の臓器は、神経、筋肉、血管は今も活動しているということが、不思議で有難くて感心できるようになった。当たり前のように動く、巧妙な人体のからくりが、当たり前のように動いてくれる有難さがわかって良かったと思う。

おじいちゃん他、御遺体の皆様、有難うございました。



卒後10年を顧みて

第三期生 森本典雄

晩秋の10月中旬には、各医局の説明会が来年の有望新入医局員の勧誘のため毎晩のように繰り返されている。

教室では新入医局員が説明会の案内ポスターを作成する習わしとなっているが、今年のN君（13期卒）が担当したポスターは術前胸部レントゲン写真、術中写真（心房中隔欠損孔パッチ閉鎖術）、稲葉医局長（2期卒）が温和な眼差しで術後管理する姿をとらえた写真3枚組から構成されN君自身の入局、患者体験が題の一字に託されている佳作である。思えばや11年前の昭和55年の今頃、私も卓球部の先輩への義理立てで参加した肩身の狭い単なる御食事会と本命の第一外科説明会に出席したが会の内容は全く忘れた。当時、助手で医局長の中島先生（現、手術部助教授）から再三にわたる三、六界限、居酒屋への誘いをうけ力説してくれた先生の哲学の一端に触れたのを鮮明に記憶している。学生時代、部活動に励み卒後これを究めたいという強い意志もなく、臨床医になりたいと考える一般的な医学生であった私を多忙で私的時間の確保の難しい第一外科入局へと決意させたものは、これからの疾病構造の変化に順応できる外科医を育成するという方針と世界的研究が出来るんだという医局長の夢への憧憬であったと思う。起承転結の早い外科が元来、性急な私の性に合っていると思い込んで初代鮫島教授の門を叩いたのは、卒業試験中の冬休み明けと記憶しているが正確な日時は覚えていない。一生を左右するといわれている医局の決定はそれぞれにこんなものではないかと思うが、卒業前にあれこれ真剣に思い悩み、将来を熟慮しても、ことのほか思い通りにならないことの多いのも、チームの一員として働く外科医の宿命であろう。結局は人と人との出会いが直接のきっかけとなる事が多く、最終的には可能性に賭けてみるという心境に至り決定するのであろう。

私の人事異動の度に書き加えられる職歴をふり返れば、昭和56年5月入局後、北見赤十字病院、市立旭川病院、留萌市立病院をそれぞれ1年間、美深厚生病院3ヶ月、町立芽室病院1ヶ月、枝幸町立国保病院8ヶ月および宮崎医大病院3ヶ月と合計4年3ヶ月の大学外での研修を終え、大学では麻酔科研修を含め6年2ヶ月を送っている。資格は日本外科学会認定医だけで胸部外科認定医、学位は未だ取得していない。現在大学では冠動脈から胸腹部大血管、末梢血管を扱う循環器外科を久保教授の御指導のもとに学んでおり、入局時の漠然と描いていた一般外科医とは、かなり懸け離れた目標となってい

る。この道を選んだ直接の動機は2年目研修で1年間お世話になった市立旭川病院胸部外科での経験である。上行大動脈を遮断し、心停止液の注入による心停止を得て限られた時間内に術者を中心としたクルーが、ひとつの目的のために心地よい緊張感を持ちながら手術を遂行する。手術を終え徐細動され心拍動が再開され蘇った心臓に直接触れた時の興奮が未知なる私の潜在意識を刺激するのであろう。もっとも笹嶋助手（現、助教授）をはじめとする血管グループの魅力的人材に引かれた事は勿論である。

助手になってから学生に接し、外科は何年で一人前になれるんですかと月並みな質問をされる。私は外科に限らず医師には免許皆伝はなく、自分がゴールと考えた所が個々の最高到達レベルであろうと思う。1人ひとりそれぞれの個性があり、わがままな患者の命に関わる職にある私達には、日々は修練という気概が大切であり、これは宮大工や料理人の職人気質である物事へのこだわりに通じると考えるのは私だけであろうか。

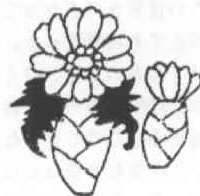
私的には5年前に結婚し二児の父親としての責任もあり、留守を預かる妻には常に感謝している。最近、腰椎椎間板ヘルニアを患い、減量と腰痛体操に励み、医局ゴルフハンディは22どまりである。

大学は人間の集まりであり、環境も大部分は人間関係に負うところが大きい。これからの旭川医大が21世紀に向けて生き残れるかは、理屈ではなく、魅力的な大学でありたいとする、個々の意識レベルの向上が大切と考える。

今年のワールドカップラグビーで前回優勝のニュージーランドの元プレイヤーが、日本のラグビーの課題は何かというインタビューに答えた言葉は「スピード、テクニックでは、かなりの部分はカバーできるが、最後は個々のパワーの総合力が重要です。」であった。

’91.10.20 美深出張にて

(旭川医科大学第一外科)





卒業後10年に思うこと

第三期生 山 野 三 紀

卒業後第三内科に入局し大学での研修、一線病院の勤務さらに大学での基礎研究とあわだしく過ぎてしまっ
て、平成3年4月から旭川厚生病院消化器科にきている。
同じ旭川ということもあって同期をはじめ先輩・後輩と
顔を合わせることも多く、仕事上のつながりにもなりた
いへん助かっている。

医者是一人では仕事が出来ない。いくら不眠不休で頑
張ったとしても、個人の能力には限界があるし、多くの医師
が関わることは患者の受ける医療の質的向上にもなる。患者
の検査依頼から患者の都合による転医まで、あらゆるコネを
使ってお願ひし回っている。特に同期の存在はありがたい
ものがある。同じ科の同期はもちろんのこと、他科の専
門的な知識や技術が必要になった時に、腹を割って率直
に意見を聞いたり、助けてもらえる頼もしい存在である。
また、シビアな意見を言われたとしても不思議と腹がた
たないし、たまにはしくじることがあってもなぜか許せ
る。またこちらに依頼されるとやけに嬉しかったりもす
る。“〇〇で困ったときにはぼくが診てやるから”とか
“××の時は回すからな。たのむぞ”なんて一丁前にな
ったつもりで話した学生時代が思い出される。

先日、久しぶりに同期が顔を合わせる機会があった。
かつての紅顔の美少年（美少女）たちはお腹の筋肉が緩
み、そのふさふさとした毛髪はまばらに、そしてカラス
の足跡が気になる年頃になった。しかしそれらは様々の
経験とともに彼らにちょっとやそつでは動じない貫禄
を与えつつあるように見えた。かつて三六街で鳴らしたブ
レイボーイは娘を溺愛するパパに変貌し、各医局の医局
長が数名、立身出世をめざし猛勉強に励むものあり、マ
イペースで悠々自適のものありで、当初その変貌に驚か
されもしたが、話をするうちに10年間があつというまに

飛んでしまい、お互いにあの頃とちっとも変わらないこ
とに気づき、安心するやら、嬉しいやらで楽しい一時を
過ごすことができた。

最近の学生には同学年であっても卒業するまでに一度も
話をしたことのないものがあるそうであるが、私たちの
ころはそんなことはなかった。新設されたばかりで大学
周辺にはいまのように喫茶店や飲み屋もなく、しかも交
通の便は悪く、“こんな大学ってないよなー”と愚痴り
ながら、いつも大学内の喫茶店や食堂にたむろし、遊び
はボーリングにしろカラオケにしろみんなで行ったとい
う at home な雰囲気懐かしく思い出される。

最近女医の数も増え、医局が華やかになり、雰囲気
も変わったと年輩の先生方にもいわれる。皆さん、仕事
熱心で頑張り屋で、仕事上は男医に負けないし患者の評
判も良く、しかも、女性らしいやさしさや、明るさを忘
れず魅力に満ちあふれている。しかし、私たちは男性社
会の仕組みにまだ慣れていないために、男性社会のいわ
ゆる常識を知らずにいて、思わぬ誤解を招くことがある
ような気がする。それらの常識には必ずしも良いことば
かりではなく、端からみても変なことだと思ふ。それら
を変えようとするのは大変なことだと思ふ。しかし、温故
知新の精神を忘れず、先輩女医の地道だけれど着実な歩
みが現代の状況を作ってきたように、私たちも努力を怠
らないようしたい。そのためにも数多い多彩な友達は一
必要であると思ふ。

以上思いつくままにまとまりもなく書いてきてしまっ
たが、最後にこれまでお世話になった方々に感謝すると
同時に、これからもみんなと共に歩んでいきたいと思っ
ている。

(旭川厚生病院消化器科)



留学生寄稿



ハジェフ・クリスト・アレクサンドロフ

私は、1990年10月より旭川医科大学産婦人科学教室に在籍しているブルガリア出身の留学生のハジェフ・クリスト・アレクサンドロフです。私は1985年ブルガリア医学アカデミーを卒業した産婦人科医であります。私の国のブルガリアはヨーロッパの東に位置し、ギリシアの北、ルーマニアの南、黒海の西にあり、私の故郷は東の国境沿いです。ブルガリアの人口は少なく約 800万人です。スラブ民族がヨーロッパの南方へ移動し、古代ローマ帝国の一部であった地区の先住のトラキア人と混血し私の祖国は西暦 681年に建国されました。ブルガリアは小さな国ですが、北方に広い平野があり国の大部分の農業がそこで営まれています。バルカン半島の最大級の山々は国の南西部に位置しています。ブルガリアの首都はソフィアで人口は約 100万人です。また、ソフィアはヴィトシャ山の底部に位置しており、有名な冬のスキーリゾート地でもあります。

今迄、美しい北海道各地を旅行する機会があり、そのことがこの地域の人々の生活様式や文化を理解するのに有益でした。

また、北海道の自然は大変私の国に似ており、色々な意味で私は故郷にいる感じがいたします。本当に北海道の美しい自然は神の恵みであります。クリスタルのような空気、多くの湖、ラベンダーで有名な美瑛のような多数の観光名所、白金温泉、函館の美しい海など、旅人にとって北海道は魅力的な所です。その他、地元の新鮮で美味しい食べ物、例えば北海道の牛乳、美味しいチーズ、ジンギスカンなどはここに住む外国人にとって極めて楽しいものであり、さらに典型的な日本食や各種のシーフードも極めて魅力的です。

現在、私が属している旭川医大は極めて近代的な医学施設で旭川市の美しい西神楽に位置しています。ここでは多数の器械設備のみならず多くの専門家は世界的レベルであり、旭川市民の健康の管理を十分満足させるものであると私は考えます。私のような外国人にとって、日本人の全ての人々に高い医療サービスを提供するユニークな日本の医療システムを知ることは極めて興味深いものがあります。適切な医療を得るためには莫大な費用を要したり、多数の人々が医学的関心をもつ余裕すらない世界の多くの国々と比較して日本の医療システムは確かに優れていると考えます。

旭川医大産婦人科学教室で、最初の研究は超音波医学による胎児の血流に関するものです。超音波パルスド

ップラー法を用いて、胎児の臍帯動脈、中大脳動脈、内脈骨動脈、外腸骨動脈、大腿動脈の血流計測を行い、子宮発育遅延 (IUGR) や胎児仮死を従来の方法より早期に診断する可能性を検討しました。胎児血管は、血流と超音波ビームの角度の補正が困難であり、血管径が小さいため断面積を求めるうえで大きな誤差が生じ血流量の評価に大きな問題があったため、今回は角度補正の必要としない pulsatility index (PI) を用いました。その結果、IUGR では中大脳動脈の PI が減少し、外腸骨動脈、大腿動脈の PI が増加するいわゆる brain sparing effect を認めた。また、IUGR の診断は単一血管では中大脳動脈 PI 値を求める方法が精度が高く、総合的には、中大脳動脈 PI 値/内腸骨動脈 PI 値比を求める方法が最も診断精度が高かった。以上の成績は、J. Maternal-Fetal Investigation の最新号に掲載予定であります。現在は、生殖生理学の研究で精子における活性酸素消去酵素の super-oxide dismutase の局在を免疫組織化学的に検討しております。

私が住んでいる緑が丘の夏の美しい緑、きれいな住宅、平安な雰囲気の中での多くの友人達との交流は、私にとって極めて楽しいものであります。旭川で過ごした日々は私の仕事に極めて有意義であり、私を援助していただいた多くの友人に心から御礼申し上げます。

(訳 産婦人科学講座 石川陸男)

生年月日	1960年4月14日
所 属	産婦人科学講座
在籍期間	1990. 10. 1 ~ 1992. 3. 31
国 籍	ブルガリア
留学前の最終職歴	ソフィア大学附属病院産婦人科 (医師)



海外だより

アフリカツメガエルと抗癌剤

NIH・National Institutes of Health
NCI・National Cancer Institute
Navy-MOB・Navy Medical Oncology Branch
Naval Hospital Bethesda, Maryland USA

大崎能伸

私の留学している NIH、NCI-Navy MOB は、臨床腫瘍学の実験研究室で、臨床試料や細胞株を用いて主に癌細胞の性質を研究しています。私の属する実験室は医師4名、実験助手4名で、国籍はアメリカ4名、オーストラリア1名、ベトナム1名、韓国1名、日本1名です。私は、ここで抗癌剤感受性試験とペプチドレセプターの発現をテーマに研究しています。レセプターの研究では、mRNAレベルと機能面での発現を、肺癌細胞を用いてナトリウム利尿ペプチドレセプターについて調べました。肺癌細胞でのこのレセプターの発現は非常に弱く、存在を証明するのに苦労しましたが、肺癌細胞がこのレセプターを持つことを示す事ができました。薬剤感受性試験では、肺癌細胞株を用いてカエルの皮膚から分離されたペプチドの抗腫瘍効果を調べました。この研究を簡単に紹介したいと思います。

日本でも昔からカエルの分泌する体液に何らかの薬理作用がある事は信じられていたようですが、残念ながらその昔にはカエルの分泌液を分析して、化学構造を調べ、試験管内で大量に合成してその物質の性質を明らかにする方法がなかったので、「ガマの油」は縁日で売られる運命となりました。しかし、現代になり、カエルの皮膚で合成されるペプチドは、科学者の好奇心の対象となり、科学のメスが徹底的に入れられました。その結果、カエルの皮膚から2つのグループに属するペプチドが分離されました。ひとつはレセプターと結合して薬理作用を示すペプチドのグループで、bombesin や bradykinin 等が含まれます。bombesin (GRP) は肺癌細胞でも産生される細胞増殖因子で、発癌や癌増殖に関係すると考えられていて、私のいる MOB でもさかんに研究されています。肺癌細胞は GRP のレセプターも発現しており、癌細胞で合成された GRP が自身のレセプターに結合して細胞増殖を促進するオートクリンの存在が示されています。もうひとつのグループは、殺菌作用のあるペプチドのグループで、マガイニン1、マガイニン2等が含まれます。マガイニンはアフリカツメガエルの皮膚から1988年に分離されたアミノ酸23個の小さなペプチドです。アフリカツメガエルは私たちの学生時代、生物学実験室で飼育されていたカエルで、ぶよぶよしたその姿によく滅亡せずに生きのびてきたものだと妙に感心したものでした。しかし、このカエルを見てだらしないう姿にあきれるだけではなく、ある現象に気がついた科学者がいました。このカエルは手術の後の傷が感染を起さないのです。そして、この科学者は、殺菌作用をめやすにして、アフリカツメガエルから殺菌性ペプチドのマガイニンを分離

しました。つまり、彼の科学の目にはアフリカツメガエルの姿の中に抗生ペプチド、マガイニンの発見が見えていたわけでした。

さて、マガイニンが精製されて化学構造が分析された結果、このペプチドの3次構造が殺菌作用と関連する事が明らかにされ、より強調された3次構造を持つ、マガイニンAとマガイニンGが合成されました。マガイニンの薬理作用はまだ解明されてはいませんが、細胞膜に作用して、細菌を膨張、破裂させると考えられています。私が留学して最初の仕事は、この合成マガイニンの抗腫瘍活性を調べる事でした。そして、6種類の肺癌細胞株、4種類の正常細胞を用いて殺細胞効果を調べた結果、合成マガイニンは肺癌細胞に対して殺細胞作用を示す事、正常細胞に対して同等の効果を得るためには約3倍高い濃度が必要な事、従来使用されている抗癌剤と併用効果を示す事などが明らかになりました。すなわち、マガイニンが抗生剤としてだけでなく、抗癌剤としての可能性を持つ事が示された訳です。この他、マガイニンが精子を不動化する事も報告されており、避妊薬としての可能性も考えられています。

癌の治療成績を向上させるためには、癌の生物学を研究して、その弱点を探り、新しい治療法と予防法を開発する事が大切だと思います。マガイニンの発見が、ペニシリンの発見のように、多くの人々を病から救うかどうかはまだ知る事はできません。しかし、小さな好奇心や疑問を解く努力が新しい治療につながる可能性がある事を、マガイニンの研究を通して改めて考えさせられました。癌は自然から私たちに出题された大きな難問です。しかし、この問題は意外と小さな事実が解答に結びつく鍵を持つのかも知れません。世界中の科学者は、この小さな鍵を求めて膨大な量の研究活動を続けているのです。

(内科学第一講座)



(NIHメディカルセンターを背景にして)

研究室紹介

■ 寄生虫学講座 ■ 稲岡 徹

寄生虫学講座は、北海道の医学系大学としては、この方面の唯一の研究機関として昭和50年に開設され現在に至っている。その間スタッフに大きな変動はなく、久津見晴彦教授、宮本健司助教授、稲岡徹助手、中尾稔助手、盛眞智子事務官と、現在は本学動物実験施設の中谷和宏技官に、研究生の石川裕司医師が構成メンバーである。

北海道は冷涼の地で、一般に寄生虫などあまり縁のない土地柄と認識されているようだが、日本に残された最後の風土病とも言うべき多包虫症（エキノコックス症）が蔓延し、住民に重苦しい不安感を与え続けている。この疾病は人獣共通寄生虫症の一つで、人への感染経路が不明のまま、虫卵を含む沢水などの飲用が主因であると漠然と信じられてきた。久津見教授を中心に、講座を挙げてこの問題の解明に取り組み、公衆衛生学の土井陸雄助教授（現横浜市大教授）の協力を得て、広範な疫学調査を実施し、畜産業関係者が多包虫症感染のハイリスクグループであることをつきとめた。この結果は論文・学会で内外に発表され大きな反響を呼んだ。多包虫症に関しては、薬物治療の研究も進めており、動物実験は主として中谷技官、人体治験例は石川医師が担当して興味深いデータが蓄積しつつある。

宮本助教授、中尾助手はライム病とその媒介者である

マダニ、さらに病原体の保有動物と予想される野生動物の研究を精力的に進めている。ライム病は1970年代からアメリカで AIDS に次ぐ重要な感染症として社会問題化している疾病であるが、日本での研究は端緒についた所である。宮本助教授らはマダニ、齧歯類、鳥類から 500 にもおよぶ病原体株を分離し、また本学の皮膚科、整形外科との共同研究により、日本で始めて患者からの病原体検出に成功するなど、日本におけるライム病の研究をリードする立場にある。

稲岡助手は、国内はもとより世界各地で、寄生虫媒介性の吸血昆虫、特にアブ科の研究を行い、新種の発見、生態の解明、防除法の開発などに成果をあげている。

盛事務官は事務的な仕事に加えて、実験の準備や飼育している実験動物の面倒までテキパキとこなし、講座の運営になくなくてはならない存在となっている。

寄生虫疾患が現在では熱帯・亜熱帯の開発途上国に偏って分布しているため、メンバーはしばしばこれらの国々へ、研究あるいは防疫事業に参加するために出向く。アフリカ、中南米、アジア、オーストラリアなど、その意味で世界中が研究のフィールドである。海外旅行に出る際に情報を得るために当講座を訪れる学生も多い。どの様な用件であろうと、学生諸君の訪問は大歓迎である。また意欲ある新人の入局を待望している。

（寄生虫学講座 助手）

研究室紹介

■ 耳鼻咽喉科学講座 ■ 金谷 健史

当教室は昭和51年海野徳二教授によって開講されました。開講当時のスタッフは九州大学出身が中心でしたが、その後海野教授の出身校である千葉大学より林崎前講師が、札幌医大より白戸助教授、坂本前助手が、和歌山医大より矢島前講師、川堀講師、高橋講師が、さらに昭和大学から富山前助手が、東京医科歯科より吉田前助手が参加し、現在の医局体制の基礎ができました。昭和54年本学1期卒業の内藤前講師が入局し、その後平成3年までに卒業生を中心として40名の入局者を迎えております。

当教室の臨床は、開講当初より頭頸部腫瘍の治療を主眼に置いています。その頃は道内で頭頸部腫瘍の手術を手掛ける施設がほとんど無かったこともあり、少ない耳鼻科の病棟はいつも腫瘍の患者で満員でした。このような豊富な症例、海野教授ならびにスタッフの厳格な指導により教室員たちはめきめき実力をつけ、頭頸部腫瘍に対して現在では大学と同等、症例によってはそれ以上の治療が関連病院で行われている事は頼もしい限りです。この様にアクティブに活躍している関連病院は道北、道東、道央、道南と道内各地を網羅しそれぞれの実情にあった地域医療を目指しています。

研究面では海野教授を中心に野中助手、畑山助手、長野

助手がそれぞれ、呼吸ニューロンに対する鼻呼吸の影響、音波を利用した新しいライノメトリーの臨床応用、鼻腔抵抗の中枢神経機構の解明に取り組んでいます。また白戸助教授を中心に金谷、上戸助手が姿勢制御に関する基礎的、臨床的研究を行っており、さらに川堀講師、高橋講師、北南助手を中心に鼻アレルギーにおける肥満細胞の研究や、内耳、中耳免疫の基礎的動物実験が行われています。これらの研究成果は国内、国外で積極的に発表され高い評価を受けております。熊井助手、金井助手はアメリカ、カナダに留学中、大学院生は生理学第2講座や、病理学第2講座でそれぞれ修行中ですが、帰ってからの健闘が期待されています。

医局行事は、花見、登山、スキーと色々ありますが最も伝統があり規模の大きい行事は、大雪山イワナ釣り旅行です。関連病院の先生方や、教室にゆかりのある諸先生、さらには教授の恩師まで加わり“何匹釣ったの、これが一番大きいの”と毎年大賑わいです。

以上簡単に耳鼻咽喉科学講座を紹介致しました。本講座は未だ発展中です。卒業生の若い力を大いに歓迎致します。

（耳鼻咽喉科学講座 助手）

体 育 大 会

今年も9月4日(木)、学年対抗の体育大会が開催されました。爽やかな秋空の下、全員参加の綱引きをはじめ各種目に熱戦が繰り広げられケガもなく無事終了しました。各種目と各学年の成績は次のとおりです。

(学生課)

学年	サッカー	バスケ	ソフト	綱引き	リレー	駅伝	合計点	順位
1年	2	5	7	10	3	5	32	3
2年	10	2	2	2	5	1	22	5
3年	2	7	10	7	7	7	40	1
4年	7	2	2	2	1	10	24	4
5年	5	10	5	5	10	3	38	2



解 剖 体 慰 霊 式

平成3年度解剖体慰霊式が、9月25日(木)午後1時30分から本学体育館において執り行われました。

式に参加した御遺族・御来賓・本学教職員・学生は、本学の教育及び学術研究のために尊い御遺体を提供され、医学発展の礎石となられた137名(病理解剖52名、法医解剖59名、系統解剖26名)の方々の御遺徳を偲び御冥福を祈念しました。

(庶務課)



「公開講座」好評を博し終了

本年度の公開講座は、10月3日から31日の期間に10回にわたり、ニュー北海ホテルを会場に実施されました。

これは、大学開放事業の一環として、市民に学習の場を広く提供する目的で毎年行われているものです。

今年は「老年期をすこやかに」をテーマに、精神医学講座 宮岸教授が実施責任者となり、本学の教官9名が老人性の病気について、スライドやビデオを使いながら、時折ユーモアを交えてわかりやすく講義しました。

本学の公開講座も今年で6回目を迎え、市民の関心も高く、19才から82才までの256名の受講申込みがあり、受講者の中には、昨年に引き続き受講する方や夫妻の姿も見受けられました。

受講者は終始熱心に聞き入り、活発な質疑も行われ、本年度の公開講座は好評の中、終了しました。

(学生課)



(公開講座風景)

新 入 生 研 修 (第 2 回 目)

新入生研修(第2回目)が10月28日(月)・29日(火)・31日(木)・11月1日(金)に行われました。

第1学年全員を8グループに分け、1グループに教官2名(一般教育1名、基礎・臨床1名)が指導にあたり、①前期終了後における修学上の諸問題、②学生生活上の諸問題などを中心に研修が行われました。

(学生課)



教官の異動

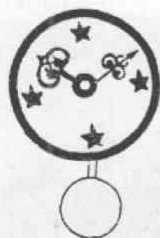
(昇任)

笹嶋 唯博 3.9.16 外科学第一講座・助教授

スキー教室のお知らせ

恒例のスキー教室(定員40名)が今年も12月16日~17日の2日間にわたり旭岳スキー場で行われます。

今年は、外国人留学生も交えての親善交流や自然観察コース設定などもりだくさんの企画となっているため、早くも受講希望者からの照会がありました。



怒外

寺山 和幸

近ごろ気になること

私が旭川にきてもう16年目である。すると、今の4年生は、16期生ということになるだろう。

旭川で私が最初に住んだのは、宮下1丁目にあった家賃月額3,500円のアパートである。夏は暖房、冬は冷房が完備し、ひどく埃っぽいことを除けば、私には快適な住まいであったが、今の学生諸君にはとても住めないかもしれない。当時、医大のそばにはお店も少なく、下宿やアパートもほとんどなかったから、大部分の医大生は町中に住んでいた。このアパートにも1期生と2期生、2名の医大生が住んでいて、旭川の町のことや、医大に関する情報を与えてもらった。アパートの管理人さん夫婦がこれまた親切な人で、「たまった洗濯物を持ってらっしゃい。」と、奥さんが定期的に呼びにくる。私が洗濯物を持っていくと、すでに上機嫌の管理人さんが、「先生、洗濯の間、ちょっと一杯どうですか。」と、サントリーレッドかハイニッカの大ビンから、私にウイスキーを勧めた。私の洗濯物は、奥さんが全自動洗濯機に洗剤と一緒に放りこんでくれているので、飲みながら洗濯が完了するのを待つしかない状況になっていた。こんなわけで、アパートの隣がコインランドリーであるにもかかわらず、私は一度もそれを利用することがなかった。

2年後、このアパートは、10倍の家賃のマンションに建て替えられることになった。やむなく私は別のアパートに引っ越し、そのとき思い切って、あの便利な全自動

皆さんも北海道の最高峰で雪を十分楽しんでみませんか。

(学生課)



洗濯機を買ったのである。その後、この洗濯機は、結婚の際の私の数少ない嫁入り道具になったのだが、しっかりとぬのかみさん(?)は、汚れが落ちにくい、洗剤も水も余計にかかると言っただけで、脱水機代わりにしか使ってくれない。

結婚後は主に経済的な理由で、3・6街に出ることがほとんどなくなったが、結婚前は、1、2、3期生あたりとよく一緒に飲んだり遊んだりした。当時の学生は、よく遊びましたが、自分が何をなすべきかをわきまえ、勉強もしたように記憶するのは私だけであろうか。1期生の時には、私も初めての実習担当だったので失敗があった。予備実験を行い、十分準備をしたつもりだったが、私の計画の甘さから予想した結果が得られなかった。担当グループの学生に「申し訳ない。ぼくの責任だから、発表会のときは、実験計画の不備で結果が出なかったと報告して下さい。」と言うと、「計画を立て直して、土曜、日曜にもう一度実験します。」との返事で私を救ってくれた。こんな昔の回想をすることは、私ももうりっぱなおじさんになったということか。

「近ごろ気になること」とは、学生諸君とのギャップである。教官に対する態度が不通で、「無礼ボーイ」と呼ばれる学生だった私だから、本学の学生の多少の無礼さは寛容したいと思う。講義の最中、教室の外で碁や将棋やトランプをし、出席カードを配るときだけ堂々と入室し、名前を書き終えると出ていく無礼者。実習のとき、操作手順や理由を質問すると、「わたし筋肉だから答えられません。」とあっけらかんとする女子学生。その横で、頭も使わず、筋肉にもならず、おしゃべりばかりしている男子学生。大学祭のとき助っ人を頼んできたあるクラブの学生。約束の8時にいってみると、来ていたのは同じ助っ人ばかりでクラブ員はゼロ。助っ人を1時間以上も待たせておいて、「おながが空いたので飯を食べてきました。」もないもんだ。「無礼者、みんなまとめて手打ちにいたす。」と言いたいところだが、君たちは発展途上人であることを考慮し、許してやろうか。

(衛生学講座 講師)